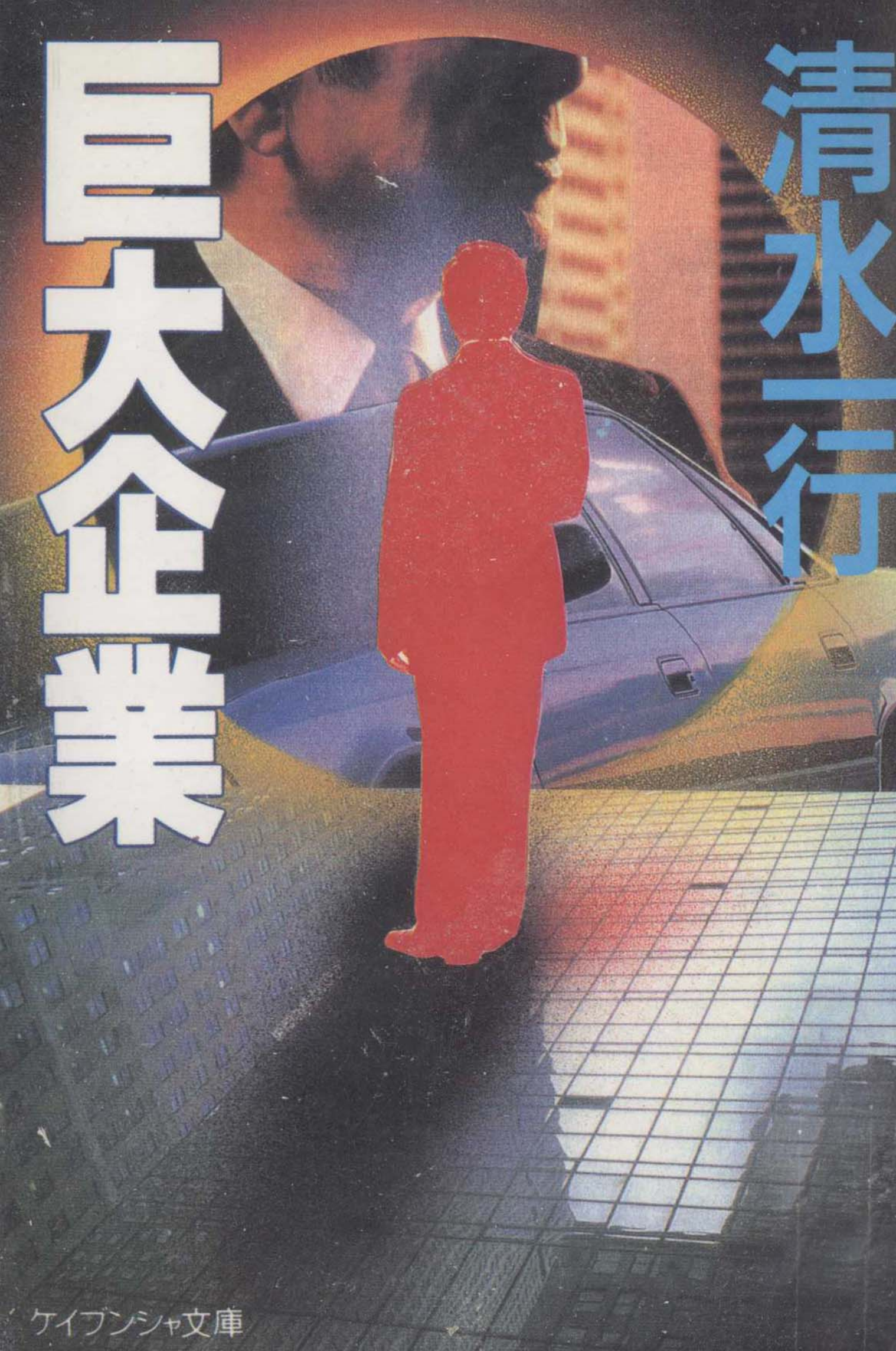


巨大企業

清水一行



ケイブンシャ文庫 308

きよだい きぎょう
巨大企業

1989年9月15日 第1刷

著者 清水一行
発行者 加納将光
発行所 株式会社 勁文社

〒164 東京都中野区本町3-32-15

電話 東京 (372)5021 (編集)
(372)3291 (営業)

振替 東京9-13311

印刷 凸版印刷株式会社

製本 明興製本工業株式会社

—定価はカバーに表示してあります—
(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

著者と了解のうえ検印を廃します。

© I. Shimizu 1989

Printed in Japan

ISBN4-7669-1018-4 C0193



巨大企業

清水 一行

ケイブンシャ文庫

勁文社

目次

第一部 X・Ⅲ計畫

5

第二部 尾行者

137

第一部 X・III 計画

曆の上では秋……のはずであったが、まだ十月に入ったばかりで、抜けるように晴れあがった空から降り注ぐ陽射しには、初秋というより、残暑の熱気がこもっているようだった。正午すこし前に、神田の千代田自動車本社ビルを出た矢沢弘一は、眩しい照り返しに顔をしかめながら、交差点の混雑する人波をかきわけるように、八重洲口のK観光ホテルに入っていた。

正面の階段を二階のロビーに上がると、約束どおり週刊P誌記者加藤文彦が待ちかまえていて、矢沢を見ると軽く右手をあげて合図を送ってきた。

「待たせたかな」

「おれもいまきたところだ」

「とにかく飯でも食べようじゃないか」

矢沢が、ぶっきら棒に言う。

「そうだな」

小柄でグレーのスポーツシャツ姿の加藤は、口許に意味ありげな笑いを泛^うかせてうなずい

た。

「なにを食う？」

「なんでもいいけど、喉が渴いた」

ビールを飲みたいという。

「仕事の方は？」

「火曜日の締切り日以外は、たいしたことないさ」

「おれの方は忙しくて、ビールどころじゃない」

じっさいこの一月くらいは、残業につぐ残業で、家で夕食のテーブルを囲んだのも、数えるほどしかないなど矢沢は思った。

「ところで、うまくいったそうだね」

二階の廊下をまわり、中華飯店の赤いテーブルに着くとすぐ、加藤が上眼に矢沢を見あげて言った。

「もう聞いたのか」

「首尾には責任を持たなければならぬからな」

「なんて言ってた」

ナプキンを膝に下ろし、抱えてきた背広から出した煙草をくわえて矢沢が聞くと、すかさず加藤がライターの火を向けた。

「なんとかして下さると思えますって、かなり希望的観測を持っていたようだ」

「それは君の頼みだから……」

「ぼくの頼みはともかく、昨夜は愉たのしかったんじゃないの」

「う、いや……」

「とぼけることないさ」

「しかし、そんなことまで報告させるのか」

「させやしないが、相手は忠実だから、昨夜は食事をしてから新宿のホテルへ行きましたくらしいのことは、言ってくるわけだ」

「いやな奴だな」

苦笑しながら矢沢は、勝手に自分の好みを二、三品注文した。

「どう、ハーフ・アンド・ハーフっていうのは？」

ビールをオーダーした加藤が、さらに品のない笑顔で聞くのには答えず、矢沢は、ちょうど昼食時で混んできた店内をひとわたり見まわしながら、煙草を深く喫すいこんだ。

倉田キティ、十九歳……。

ハーフ・アンド・ハーフはどうかと聞いた加藤の言葉どおり、倉田キティは日米の混血であつた。

矢沢はふっと吐き出した煙の中に、日本人ばなれしたキティの、白いというより、澄んだ透明感のある十九歳の瑞々みずみずしい肌、血管を泛かせて形よく盛り上がった乳房の先端の、そこだけ薄紅でも刷はいたような桜色の小ぶりな乳首を、鮮明に思い描いていた。

会ってもらいたい女の子がいる……と、加藤文彦から電話があったのは、昨日の午後のことだった。矢沢弘一は、開催日まで余すところ十日に迫った東京モーター・ショーの、キャンペーン関係の資料整理や、マスコミ相手のさまざまな注文を聞き、処理する仕事に忙殺されていた。

「いまは女どころじゃないんだ」

矢沢は持ち前の横柄さで、素気なく答えた。

眼の前のテーブルに、さまざまな資料や写真、原稿などが散乱している。関連資料が多すぎて、PR課のデスクでは処理がつかないため、わざわざ小会議室を借りて、テーブル一杯に書類をひろげた矢先に掛かってきた電話で、のんびりした加藤の口調が腹立たしかった。

矢沢弘一は三十二歳。昭和三十年に三田のK大学経済学部を卒業すると、真直ぐ千代田自動車へ入社して以来十年間、一貫してPR課に所属し、三年前に主任に昇格。馴染の新聞記者や、週刊誌の記者が多かった。週刊P誌の加藤文彦もそんななかの一人で、接触の長さから、いつの間にかたがいに遠慮のない物言いができる関係になっていた。

「気に入ったら、ものにしてもいいんだけどな」

周囲に人がいるのか、低めた声で加藤が言った。

「なに？」

「モデル志望なんだ」

「なにを言っているのかさっぱりわからん」

「だから……」

「いま忙しいんだ」

そう言つて矢沢が受話器を置こうとしたとき、

「混血のグラマーでもかい」

さらに気をひく口調で加藤が言つた。

「え？」

「良かったらモーター・ショーの千代田自動車のモデルに使ってもらいたいんだ。とにかく今夜一度会つてやってくれ、すごい美人だ」

「モーター・ショーのモデル？ それは担当が違うよ。宣伝三課だ」

「だからあんたが紹介してくれればいいじゃないか。いずれにしても一度会つてみてくれ、会つて絶対に損はしない。どう」

「そうだな……」

考えてみると仕事に追われて矢沢は一週間近くも銀座へも出ていかなかった。東京モーター・ショーまではまだ十日もある。この辺で一応息抜きをしておかないとつづきそうもなかった。

「じゃパロルで会おう」

「いやそれじゃ困る。そのこは五丁目のキャッツ・アイという店にいるんでね」

「なんだ、ホステスか」

「アルバイトだ」

なんでもいい。とにかく銀座のクラブ・パロルで落ち合ってからにしよう、矢沢は電話を切った。

だが、東京モーター・ショーで千代田自動車を使うモデルの人選は、すでに一カ月前に終わっていた。

普通のモデルと違って、モーター・ショーに採用されたモデルは、このショーのため特別の訓練を受ける。それはショーの会場で見学者から千代田自動車の各車種についてどんな質問を受けても、一通りの受け答えができるように、車の特徴から性能、価格、他車との比較などを教えこまなければならぬからである。

そのため二週間にわたって都内のホテルに合宿し、千代田自動車としてのモデル教育をすでに受け始めていた。

担当課が違ううえ、とうに人選も終えてしまっている問題だったから、いずれにしても矢沢の力ではどうにもならない。だが、担当課が違うとしか矢沢は言わなかった。加藤の、混血のグラマーですごい美人だという言葉が矢沢の意識に強く引かかっていたからだった。

クラブ・パロルで加藤と落ち合ったのは午後八時過ぎである。

「ここへ連れてきてくれよ」

矢沢は、混血の美人をパロルへ連れてくるようにと加藤に言った。

いくらマスコミ関係者との接触が仕事とはいえ、PR課主任の矢沢の権限では、どこの店で飲んでもいいというわけにはいかなかった。口座のある限られた店の使用しか認められていないのである。それだけにキャッツ・アイなどという、いままでに一度も使ったことのない店の請求書では、経理部を通らなかつた。

「小なさバーだから安いよ。たまには自腹を切つて酒を飲んでみるよ」

「他人事だと思つて気安く言うなよ。しがなひサラリーマンに、自腹を切つた銀座の酒が飲めるわけがないだろう」

「そう言い残すと矢沢は席を立ち、クラブ・パロルのママ雪代を、そつとカウンターに呼んだ。」

「また頼みたい。三枚ほどでいいんだが……」

「三枚つて、三万円？ 大丈夫なの」

「だから、いつものとおりにやってくれよ」

「それはいいわよ、わたしの方は、お勘定につけ込んで結局会社に払ってもらうんだから。でも先月四回もやっているのよ」

「迷惑はかけない。宣伝部の連中なんかもつとひどいことやってるんだ。PR課は月間一千万円の予算だけど、宣伝課は四億円も五億円も動かしているんだからな」

「ひとのことより矢沢さんのことよ」

「だから、いつものとおりにやってくれば、ちゃんと伝票を切る」

「すこし多目にサービスタ料をつけるわ、いいでしょ」

そう言いながら雪代は会計に命じて三万円を出させた。

社用の酒を飲むだけではなく、プライベートな遊びの金まで、馴染の店を通して会社から支払わせる。しかし矢沢の言うとおり、それは広報部関係の誰もがやっていることだった。

「ハツとする美人だ。とにかく行こう」

矢沢が金を都合したららしい様子を見て、加藤は急^せぎ立てるように言った。

加藤とパロルを出る矢沢の背に、奥の席でほかの客についてきた奈美子の、強い視線が注がれているのは知っていたが、それを無視して矢沢は乱暴にドアを押した。

「急ごう」

「やっとその気になってくれたか」

「まず相手を見ないことには」

「銀座や赤坂でも、ちょっとお目に掛かれない混血美人だ。おれが保証する」

「ま、いいでしょ」

矢沢は、小柄な加藤と肩を並べて、ネオンに彩られた銀座の路地を抜け、泰明小学校に近いバー・ビルの一軒に入った。

キャッツ・アイは予想したよりは店のフロアーも広く、キャンドルランプの仄暗い光に、半分ほどの席が埋まっているようだった。奥の方が落ち着くだろうと、加藤は勝手知った様子で、カウンターとは反対側の奥まったボックスに矢沢を導いた。

ほどよいスプリングのソファ―に陣取ってから、

「キティを呼んでくれ」

とビールをオーダーした加藤が、ボーイに命じた。

倉田キティは薄暗い闇の中から不意に現われた。

それは突然闇から抜け出た白い妖精といった感じである。店内の薄暗い照明のせいもあつたが、まさにそんな鮮烈な印象であつた。軽く一礼しただけの無言で向かいの席についたキティを一瞥し、社用の接待を口実に銀座ではかなり遊びこんでいるはずの矢沢が、彫りの深い、整つた美貌に思わず息をのんだくらいだつた。

「こないだ話した千代田自動車PR課の矢沢さん」

紹介する加藤の言葉を聞いて、風のような微笑がキティの白い頬をかすめた。白い頬というよりも透ける輝きを感じさせる。眸はブルーで髪は艶のある栗色だつた。加藤はグラマーだと言つたが、実際にはむしろ逆で、胸の鎖骨が浮かんでみえる細身の整つたプロポーシヨンである。

「倉田キティ、満十九歳」

おどけた笑顔で加藤が矢沢を振り向いた。

「なんだか怖い……」

そのとき不意にキティがつぶやいた。

「え？……」